静岡新聞

1～3年	楽器の魅力を再発見
音楽	

年　　組　　番　名前

☆ピアノはどんな楽器だろうか。箇条書きにまとめてみよう。

☆ピアノが習い事のナンバーワンになっている理由はなんだろう。

☆楽器は演奏する人によって音色が驚くほど変わるという。実際に音を出して確かめ、感想を書いてみよう。

コピーを生徒に渡す際、下記の指導アドバイスの部分は消してからコピーしてください。

＊指導する先生や保護者の皆様へ（静岡市立中田小学校・中村都）

誰一人として知らない人はいないピアノですが、記事から知らなかったことを発見できるはずです。楽器の演奏が不得意な生徒も、記事を読んで分かったことを、実際に音を出して確かめることにより「こうすればいいんだ」という自分なりの解決策も見えてくるのではないでしょうか。

ピアノ300年

♭上

弾き手によって音色変化

柳沢　信芳 静岡大教授

イタリア・フィレンツェでピアノが生まれて300年以上。楽器ひとつでハーモニーを奏でる豊かな音色は、数々の名曲名演奏を生んだ。8日には気鋭のピアニストが集う「第7回浜松国際ピアノコンクール」も開幕した。世界中でピアノが親しまれている理由とは―。楽器の持つ魅力に、県内ゆかりの演奏家、調律師、作曲家が迫った。

ピアノが誕生したのは、オペラや声楽が花開いたルネサンスの直後。人間の声のように、自在な表現を持つ楽器が求められたのではないか。音の強弱を利用して表現の幅を持たせる技術が求められる。

誕生した当時は、貴族のサロンで演奏されていた。貴族は、音楽や文学、思想の中に人間性を模索し、存在意義やよりどころを求めていたようだ。装飾の華やかさからも見て取れるように、調度品としての価値もあった。貴族がお抱えの職人を養成し、究極の音を求めて技術と時間をかけて作られていた。絵画と建築と音楽が入っている芸術作品ともいえる。

▼習い事止まり

ピアノに触れたのは3歳の時。海軍将校だった父親の勧めで始めた。父は戦時中、欧米の兵隊たちの生活に音楽が浸透していたのを知ったからかもしれない。子供はピアニストに、という強い思いがあったようだ。一般家庭に楽器が普及していない時期。ピアノを弾きこなすことを求められた。

その経験からか、今の子供たちが何も抵抗なくピアノを習うことに拍子抜けしている。精神的に豊かになるといううたい文句も手伝って、楽器の中でも特にピアノレッスンを受ける子は多いが、飽きたり厳しくされたらやめるという習い事の域にとどまっている。すそ野の広がりという側面では良いが、音楽を人に伝えるとは―という深いところまで入ろうとしない。

静岡大で、音楽教師やピアニストを目指す学生を教えて32年。一番大事なのは音作りだと伝えている。弾く人によって音色は驚くほど変わる。どんな音色を奏でているか追求する目、面白さを育てたい。

▼日本人として

数年間留学していたウィーンでは、現地の人は西洋音楽をやっていることに親近感を感じてくれる半面、なぜ日本人が西洋音楽をやっているのかと不思議に見られたこともある。「なぜ日本人なのにわれわれの音楽をやるのか」という問いに、当時は答えられなかった。

日本人としての作品、演奏の仕方があっていいのではないか。そしてそれらを海外に出すことが、今後の課題になる。韓国や中国のピアノ人口も増えてきている。欧米発の文化というよりも、世界規模で認知されている。その多様化に追いつかなければならない。（談）

学生を指導する柳沢教授。音づくりを追求する面白さを訴える

ピアノ　1700年ごろ、イタリア人技師クリストフォリが発明した。09年、文筆家マッフェイがクリストフォリを訪ねてピアノと出合い、その驚きを文献に記している。弦をたたく仕組みの違いでウィーン式、イギリス式、フランス式などに分けられたほか、形や装飾などは多彩だった。演奏の舞台が貴族のサロンからコンサートホールに移ると音量が求められ、強い弦が使われるようになった。家庭用ピアノが生まれたのは18～19世紀ころ。現在は規格がほぼ統一され、社会事情に合わせて消音ピアノ、遠隔演奏できるデジタルピアノも生まれている。